

武蔵野日曜集会

汝我を愛するか

――ヨハネ伝第21章15～25節――

1985年4月21日

小池辰雄

汝我を愛するか なんじ知り給う 汝は我に従え わが羊を養え 私はお前を愛している 人を助けています あなたの愛をください A40「キリストは地に在りて」

【ヨハネ伝21・15～25】

15 斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか』ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羔羊を養え』¹⁶ また二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言う『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羊を牧え』¹⁷ 三度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを愛するか』¹⁸ と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。』¹⁹ 誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帶して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』²⁰ 是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顯すかを示して言い給いしなり。斯く言いて後かれに言い給う『われに従え』²¹ ペテロ振反りてイエスの愛したまいし弟子の従うを見る。これはさきに夕餐のとき御胸によりかかりて『主よ、汝をうる者は誰か』と問いし弟子なり。²² ペテロこの人を見てイエスに言う『主よ、この人は如何に』²³ イエス言い給う『よしや我、かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝になにの關係あらんや、汝は我に従え』²⁴ ここに兄弟たちの中に、この弟子死なずと云う話つたわりたり。然れどイエスは死なずと云い給いしにあらず『よしや我かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝になにの關係あらんや』²⁵ と言い給いしなり。

²⁴ これらの事につきて証をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、我等はその証の真なるを知る。²⁵ イエスの行い給いし事は、この外なお多し、もし一つ一つ録さば、我おもうに世界もその録すところの書を載するに耐えざらん。



● 汝我を愛するか

今日はヨハネ伝福音書の最終講です。ものを歴史的に認識することは非常に大事なことです。内村先生がやはりそうでしたし、ことに藤井先生は非常にそうでした。聖書の歴史観という。福音が伝わっていく。聖書それ自身が創世記から最後の新天地の創造にいたるまでの劇的な歴史ですから。どんな学問でも歴史的に認識することがないと、本当の認識はできない。また自分で創造し展開していくこともできない。

15 斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う『ヨハネの子シモンよ、
汝この者どもに勝りて我を愛するか』

非常に著しい言葉ですね。ここにいるみんなに勝って私を愛するかと。非常にキリストは、既に福音書でみてきたように、やはりペテロは特別に顧みておられた。ヨハネはもちろんそうだけれども、ヨハネと別な意味でペテロを見ておられた。ここでも「ペテロ」と言わないで、

「ヨハネの子シモンよ」

と、非常に内側の親しいものの言い方をしている。けれども、

「汝この者どもに勝りて我を愛するか」

という表現は、ヘタすると躓く。というのは、ここでは人を比較してますから。人間のあいだで誰よりもどうだという比較は、本当はあまりすべきではないんですが、キリストは特別に例外的にこういうことを仰った。ということは、

「お前には特別な使命がある」

という気持がおりだったと思う。この場合の「愛する」という字は「アガポー」という字が使っているのだ、特に天的な愛です。しかし、この「アガポー」という字は必ずしもそういうことばかりにも使わない。かなり幅のある言葉ですが、しかし、新約では、神の愛が特に元になっているような気持です。

私は「愛」については、ゲーテの考えが非常に好きです。

「一切の愛は神から来ている」

という。それが恋愛であろうと何であろうと全部、神から来ている。そういう意味においては、それがメタモルフォーゼを起こしているわけです。あまり分析的な考え方をしない。人間の心の動きというものはそんな分析できるものではないですから。ただこういう気持が主体になっているかということが大事なですね。

「これらのものに勝って私を愛するか」

とそのまま書いてある。これはもちろん、キリストはギリシア語で言われたのではなくて、ヘブライ語です。ヘブライ語の聖書をみると、この字はみんな「アーハブ」という字が使っている。キリストの使われた言葉はこれなんです。ここでは「アガパオー」と「フィロー」と使い分けがしてあるけれども。ヘブライ語でもうひとつ「愛する」という言葉に「ヘセ



ツド」という言葉がある。この「ヘセツド」という方は、「愛する」といっても、「恵む」氣持が強い。恵愛する。神の恵み。これがまさに「愛する」という字です。これはいろんな場合に使います。

●なんじ知り給う

ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』

あなたを愛しているのは、あなたはご存じであると。この場合の「汝を愛する」の「愛する」は「フイロー」が使つてある。

イエス言い給う『わが^{こひつ}羊を養え』

「羔羊」は複数です。「養え」は「食べさせろ」という意味です。

16 また二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』

同じことをまた繰り返して言つた。これも「アガパオー」です。そうすると同じように、

ペテロ言う『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』

「なんじ知り給う」という言い方は、詩篇139篇を想いだす。詩篇139篇は旧約のことを書くときには私は必ず載せます。『エン・クリスト』（9号 1982年5月春期号）の「汝知り給う」という139篇を書いたのがあるから、読み返してみてください。

「汝知り給う」

というのは非常に深い慰めの言葉になる。また力がくる。

「人は知らなくても、あなたはご存じだ。誰に理解されなくても、あなたは知つてらっしゃる」

と。それでいいわけです。ここでも、「汝知り給う」と信頼して言っているわけです。「知る」というのは、そういう非常に信頼的な人格的な「知る」です。

イエス言い給う『わが羊を^か牧え』

今度は、「羔羊」でなくて「羊」という字が使つてある。一般的な言い方です。牧者のように飼えということです。

17 三度^{みたたび}いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』

三度目にまた言われた。こここの「我を愛するか」は「アガパオー」でなくて「フイロー」の方が使つてある。ちよつと使いわけしてある。ヘブライ語は同じでも、ヨハネが書くときに使いわけをした。キリストの氣持をくんだわけでしょう。幅のある言葉は、他の言葉で言うときにはちがった言葉が使えるわけですが。日本語でもドイツ語でも英語でもみんな、「愛する」という言葉は同じだけれども。ま、同じでいいんですよ。あるときは、恋するとか、慕うとか、いろんな言い方もあります。

ペテロ三度『われを愛するか』と言ひ給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』



そうするとまたイエスが、

イエス言い給う『わが羊をやしなえ。』

と。「わが羊をやしなえ」が三回出ている。一番先は「羔羊」ですけれども。「愛するか」も三回。三度、特にキリストが繰り返されたのは、ペテロが三度、キリストを否んだでしよ。キリストを三回否んだから逆にキリストは三回確かめた、という心理的なものがあるでしょうね。そして、そのたびにまた、

「羊をやしなえ。羊を飼え」

ということを三度繰り返した。

●汝は我に従え

18 誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帶して欲する処を歩めり、若いときは自分で思うように歩いた。

されど老いては手を伸べて他の人に帶せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』

これは受難のことです。ペテロは捕まって、やがて殉道の死を遂げる。その婉曲な表現です。キリストは先までちゃんと見ておられる。ペテロがそのうちに聖霊を受けてエライことになる。それからその先は、殉教の死を遂げるということを、こう言っておられる。

19 是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言い給いしなり。

十字架を負って仆れることを、「神の栄光を顕す」という。

斯く言いて後かれに言い給う『われに従え』。

「私と道を同じくしろ。わが道を往け。十字架道を歩け」

ということ。『我に従え』と言ったって、キリストはもう復活のキリストですから、天界に行ってしまうわけです。これは御霊によらなければ従えない。

20 ペテロ振反りてイエスの愛したまいし弟子の従うを見る。

もちろん、これはヨハネのこと。

これはさきに夕餐^{ゆうげ}のとき御胸によりかかりて『主よ、汝をうる者は誰か』と

問ひし弟子なり。

「即ち、私だ」と。ヨハネがみんな三人称で書いてますけれども。「御胸によりかかりて」という言い方は、おかしくはないけれども、少し角度が違っていたのをキリストの方にグツと向いて、胸に近いところに向ったということが、この「よりかかりて」ということです。キリストからユダが裏切ることを小耳にはさみたかった。それで、キリストの耳に近いところに自分の体を向けたということ。

21 ペテロこの人を見てイエスに言う『主よ、この人は如何に』

即ち、ヨハネのことはどうなんですか、私のことばかり仰るけれどもと。

22 イエス言い給う『よしや我、かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝に



なにの^{かかわり}関係あらんや、

この言い方は、マリヤに言われたあの言い方と同じです。

汝は我に従え』

今度は、ヨハネは特別な黙示を受ける。そのためにヨハネは簡単には死ねない。それでヨハネは別な道に行く。お前はお前の道を――パウロと同じようにローマまで――行けと。キリストは先見者ですから、ヨハネのことも、ペテロのことも、パウロのことも、先まで見通しておられる。それぞれ役割がちがうわけです。しかし、みんな同じく神の栄光を顕す。

²³ここに兄弟たちの中に、この弟子死なずと云う話つたわりたり。

即ち、ヨハネは死なないと。

然れどイエスは死なずと言いついては『よしや我かれが我の来るまで留まるを欲すとも、汝になにの^{かかわり}関係あらんや』と言いついてはなし。

そんなうわさを立てるなという。パトモスに行つて、ヨハネは黙示を受けるわけです。

²⁴これらの事につきて証をなし、又これを録しし者は、この弟子なり、

即ち、私ヨハネだと。

我等はその証の真なるを知る。

「我等」とは、ヨハネの身内のもの、ヨハネの弟子たちや同僚が入っているでしょうね。

その証の真なるを知る。

²⁵イエスの行い給ひし事は、この外なお多し、もし一つ一つ録さば、我おもうに世界もその録すところの書を載するに耐えざらん。

という。大変なことだ。

「聖書はかけらにすぎない」

とルターが言いましたが、本当にそうなんです。聖書はかけらにすぎない。書かれざる聖書というものがあるわけだ。しかも、聖書の言葉は非常に弾力性を持っていますから、言葉にとらわれないように。

●わが羊を養え

さんざん、「愛するか、愛するか」と、こういうわけです。内村先生が、

「私は二つのJを愛する」

と言った。ジーザスとジャパン。日本人は「ジャパン」なんて言わないけれども、内村先生は英語がまるで自分の国語みたいに達者な方でしたから。内村先生には、キリストを愛することは同時に日本を愛することである。だから、一つなんです。二つではない。

即ち、キリストが、

「私を愛するか」

と。そして、



「わが羊を養え」

と言われた。「わが羊を養え」というのは、詩篇23篇のごとく牧者、牧人、即ち伝道者です。

「お前は伝道しろ。伝道者たれ」

と。人をすなぐれと。

彼は魚をすなぐる漁師でした。キリストが復活したのに、ガリラヤでもまた彼は漁師になって、漁をしたところがさっぱり採れない。そしたら、復活のキリストが顕れて、舟の右側に網を下ろしてみろと言われたら、たくさんいたと。キリストは、それも一つの徴なんです。何もお魚が採れたからうれしいのではない。

「お前も、魚が採れたように、人のすなぐり人、伝道者になれ。そのためには聖霊を受けなければダメだぞ」

と。そういうわけです。内村先生は、

「キリストを愛することと日本を愛することは一つのことだ」

とは自分では仰らない。仰らないけれども、本当はこれは一つのことなんです。

今、「愛国」という言葉を使うと、すぐなにか軍国主義だと思うけれども、とんでもない。国を愛するというのは、国の人がいかに本当に生きるか、そのために道を示すのが、国を愛することなんです。キリストを愛することの具体的な表れは、内村先生においては愛国、愛国的伝道である。聖書を伝える。内村先生の若いときはぜひぶん田舎回りもされたですよ。後では閉じこもって、柏木で講義をされたけれども。柏木でじつとして講義をされて、『聖書之研究』なんていう雑誌を前からずっと出してらっしゃったが、この「研究」は無教会の躰きになった。だから、無教会は非常に学問的になってしまった。その筆頭は塚本先生。藤井先生はそうじゃない。藤井先生は学問的な研究ではない。むしろ歴史哲學的。塚本先生のあとから、前田だとか、関根だとか、何とかかんとかと学者が出た。要するに何をしてもいい。何をしてもいいけれども、それが本当の意味で愛でなければダメです。人を何とかして助け、救いあげるといふものでなければダメ。福音は正にそうなんです。いわゆる古典研究ではダメですよ、福音というものは。私なんかは、讃美歌だの、詩だのという方にいきますけれども。とにかく、そういうわけです。しかしまた、伝道はやはりせざるを得ない。小さな伝道ですけれども。あなた方に本当のものを伝えておけば、今度は、あなた方からまた花が咲いていく。一粒の麦がだんだん大きく広がっていく。あなた方自身が、やはり一人ひとり——一対一の伝道でいい——誰か友人に一対一で話して、「そうか、そういうものか」というわけで、『エン・キリスト』をやったり、とにかく、「来たりて見よ」

というわけで、集会に連れてきたり、何したっていいですよ。とにかく、自分のすることとおして、福音の力が、光が、生命が顕れていかなくは。学生なら、学生がもの凄い原動力で勉強するから凄いことになる。それもやはりこの福音のひとつの証拠なんだ。



●私はお前を愛している

キリストが「養え、養え」と言われるのは、「私を愛するか」ということです。「私を愛する」ということは、

「お前が人々をすなだめる人になれ。お前は人の漁り人になれ。人を網にかけろ」

と。実際、使徒行伝のペテロはそうです。エライことになった。ローマン・カトリックの最初の法王にされてしまった。ローマン・カトリックの元祖はペテロになってしまった。

「この上に教会を立てる」

というキリストの言葉は、あとから付け加えた言葉でしようけれども、とにかくそういうことになってしまった。

「我を愛するか」

と。「愛する」というのは、

「人を愛さなければダメだ。これが私を愛することだよ」

と。ヨハネの書簡にもそういう言葉があります。

「人を愛さないものは神を愛しているのではない」

という。

『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、主たる汝の神を愛すべし』と

いうことと『隣人を愛する』ことは一つのことだ」

とキリストは言われたでしょ。そのとおり。ということとは、

「私はお前を愛している」

というこの大前提がある。愛しようとしたって、愛せないんです。私は無教会にいて知っているもの。「神を愛する」とか、「キリストを愛する」とはどういうことだろうかと。ただちよつと感情的にそんなことを思ったって、何も愛になっていない。十字架に来て、贖いの愛にぶつかった。贖罪の愛に。そうやって贖罪をもって愛されている。そこまではまだ無教会なんです。

それから、その愛を受けとって、自分が本当にからっぽになっている。我執から抜けてしまう。そうしたら今度は、聖霊が臨む。これが御霊の愛です。手島さんが「聖霊の愛」ということをはつきり言ってくれた。そのとおり。ローマ書5章5節。この聖霊の愛がやってくるから、これが反射する。また横へ流れる。だから、

「私の愛がまだよくわからないかもしれないけれども、御霊を受けたら、私の愛が本当にわかるよ」

と。一緒にやっていたキリストの伝道の全体が、

「その言葉、その行為がいかにもの凄い愛の行為であるか、愛の言葉であるか、救いの言葉であるか。それは御霊を受けると、全部それが釈然としてくる。そして、身についてくる。そしたら、お前は羊を飼うことができる。人を救うことができる。」



敵をも愛せる」と。

●人を助けています

「汝われを愛するか」

「はい、愛しています」

と、それでは答えにならない。

「伝道しています。人を助けています」

「よし、それで私を愛していることだ」

ということになる。というのは、マタイ伝26章に、羊と山羊とを別けて、

「困っている人に水いっぱいやったか。それは私にくれたのと同じだ」

と。あの愛の行為でもってそれは天国に行くが、愛の行為をしなかった者は天国に行くわけにいかない。それは愛の行為をもって神・キリストを愛していることになるわけです。

「そのいと小さき者になしたのは、即ち我になしたるなり」

というのは、

「私を愛したことだ」

ということ。「キリストを愛する」ということは、世のため、人のために自分を挺身していることが、これが「キリストを愛する」ということです。

ただ冥想してキリストを愛したってダメですよ。冥想するならば、冥想してキリストの中に入ってください。祈りと同じことだ。入ったらば、キリストの愛が充満してくるから、その愛が外に向かって流れていく。愛せませんよ、私たちはキリストをとて。だから、キリストの中に自分を投げ込んでしまふんです。キリストの中に、あるがままの自分を投げ込むと、ここで霊的変化が起きる。

「我は門なり」

という十字架という門を通って、中に入ってしまう。そうすると、キリストの生命が、力が、愛が、光がやってくるから、充満するから、それで人を救わざるをえない。そういうことです。これが、

「我を愛するか。羊を飼え」

ということの本当の内容です。

●あなたの愛をください

ヨハネ伝は要するに最後の章でヨハネの消息の一番の中心点、焦点にきたわけです。私は、キリスト新聞に5回書くことになっている。第1回が「ヒルティと私」です。これは「愛は一切に勝つ」という表題になっています。ちよつとお読みします。(省略。小池辰雄著作集第九巻『感想と紀行』の25頁「ヒルティと私」参照。続いて「ダンテと私」を朗読。同巻29頁参照。)



ヨハネ伝の最後の章のキリストとの問答で、キリストは、

「汝、われを愛するか」

と言う。これは私たち自身に、「汝、われを愛するか」ということを本当に問われている。そのときにまず、さつきも申し上げましたけれども、

「私はあなたを愛しません。あなたの愛をください」

と。それが本当なんだよ、正直。それは、

「私の愛はお前にやってあるではないか。十字架と聖霊だよ」

と。この十字架と聖霊をもつて、キリストは私たちを愛してくださった。これはもう他にかけがえのない愛です。この愛は十字架と聖霊です。贖罪と永遠の生命です。またもの凄い力を持っている。聖霊の中にはあらゆる要素が入っている。何をしようと、あなた方のやることが全部、聖霊の力で本ものになってきますから。

「これを全部、お前にやった。これ以上のものがあるか」

とキリストは言われる。そうしたら本当に、

「参りました、ありがとうございます」

しかないじゃないですか。愛せざるを得ないじゃないですか。もうたまらない。

この「愛する」ということと「信ずる」とは同じことですよ。「愛する」ことも「信ずる」

も同じこと。これにぶつかったら、自分の精神状態がどうであるか、肉体の状態がどうであるか、そんなことは問題じゃない。そうしたら俄然これが全身に満ち満ちてきますからね。もう信ぜざるを得ない、愛せざるを得ないことになってしまう。それは同時に、その喜びを、その力を、その生命を人に与えざるを得ない。伝道せざるを得ないわけです。

皆さん、一対一でもつて伝道せざるを得ない人が本当のクリスチャンだ。その

「伝道せざるを得ない」

ということが、

「本当に我を愛するか」

「はい、愛してます」

ということの答えになる。今度は口の答えではない。実行をもつて、不言実行。実存をもつてそれを証明する。黙って、「このとおりでございます」と言えればいい。「このとおりでございます」と言う必要もない。

「お前はよくそうやって人を助けているね」

と仰ってください。

信仰の世界に入るのに、遅いも早いもないですよ。いつだっていい。自分を本当に投げ入れればいい。解ろうなんてするからわからなくなる。あるがままに投げかけてくればいい。普通の教会へ行ったら知らんよ。しかし、ここに来たらば、それは本当に、全く「来たりて見よ」というわけです。私はキリストを告白しているんだから。



どうぞ、皆さんは一对一人で人に伝道してくださいよ。相手が受けとろうが受けとらなからうが、とにかく、

「パンを水の上に投げる」（伝道の書）

ではないけれども、それでやってください。こちらが本ものだと、何かうつるんです。人の魂というものは本ものにぶつかると、「何かこれはちがうなあ」ということになる。

●A40「キリストは地に在りて」

召団讃歌A40「キリストは地に在りて」（1985年2月21日作）

——キリストとペテロ（ヨハネ伝21章）——

1 キリストは地に在りて 枕なき旅の人よ！

キリストは罪の世に 神のみ業神の言

ハレルヤ ハレルヤ

あらわしませり 見よこの人！

誰か知らんこの真理を 身を提し来たりて見よ

2 主イエスはよみがえり テベリヤの湖辺近く

弟子どもに現れて「舟の右舷にあみを卸せ！」

ハレルヤ ハレルヤ

網に満ちたる大漁なりき

誰か知らん主キリストの 深き愛今も然り

3 「ああシモン愛するや」 「主よ然りわれは愛す」

主は三度問い給う「主をば愛し聖名を讃う」

ハレルヤ ハレルヤ

「牧の羊を確かと飼えよ！

噫、ペテロ、我れと供に 十字架の道を往けよ！」

この21章15節から23節までの言葉を、なにもペテロに言われた言葉としないで、我々自身にキリストがかく語りかけ、そして我々はキリストの中に身を投じていく。そうして、なるほど人に道を伝えざるを得ない、この生命を分かたざるを得ないということを一对一で実証していく。その実証のないときには、はつきり言って、我々は天国にいけません。

「ちよつと待ってくれ。お前は信仰、信仰といって、聖書の研究ばかりしているが、

ダメだよ、無教会式にやつたら」

なんて言われる。どうぞ、そういうことですので実証してください。そして、それだけやってもなお受けない人は自分でどこかへ迷ってしまうだけの人はなしき。お気の毒さまということだ。福音を拒めばそういうことになる。福音の世界は、「然り」か「否」かであつて、三人称的な単なる認識ではないですからね。それではこれで終りにします。

